



ウルフェン *The Wolfen* (1978) ホイッ
リー・ストリーバー
(山田順子訳) 早
書房 (7/15 刊・
1000)

狩り場はニューヨーク、獲物は人間、そして、狩人は「ウルフェン」たち……。

廃車置場で惨殺された二人の警官——その現場で、市警の名物コンビ、女刑事のネフとベテラン刑事ウィルソンは、不審な痕跡を発見する。そんな彼らを、じっと監視する獣の眼。オオカミでもなく、人間でもない、かといって、伝説の狼人間そのものとも違う。人類の歴史の裏側に隠れ棲む、もう一つの種族——こう書けば、たいていのSFファンにとって、おなじみの設定だろう。目新しい発想ではない。しかし、転倒した視点、人間は、古代よりウルフェンたちの「獲物」とか、都会のビルの谷間に展開される狩り等が、なかなか新鮮な味付けである。

今秋公開予定の、映画の原作にあたる。著者は映画関係に詳しく、場面の転換や、物語の運びには、成程と思わせる見せ場がある。

一方、満遍なく書かれた分、何か喰い足りない。ウルフェンや、主人公たちの心理描写など、中途半端な部分がかなりある。いずれかに統一すべきだったのかも知れない。

あえて分類するなら、サスペンスかホラーに近い。SFとはいえないだろう。